
地味は地道に我道を

壱織丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地味は地道に我道を

【Nコード】

N5297I

【作者名】

吉織丸

【あらすじ】

ワタクシ吉織丸こと地味女が変わっていった波乱万丈な実話を連載します。

まだ知らない（前書き）

人生何があるかわからない。

転機や危機を乗り越えるか逃げるか自分次第。

私は…。

まだ知らない

ワタクシ『吉織丸』こと鈴木あや（偽名）はどうしようもない地味女です。

…がこれから鈴木あやの身に起こる様々な転機と危機。

それにぶつかる度に変わっていく鈴木あやの本当にあつたお話を執筆させていただきます。

さすがに名前は偽名を使わせてくださいね（笑）

鈴木あや（偽名）は田舎育ち。

2歳下の妹あり。

鈴木さち（妹）は小学校から有名なモテ女、カリスマ女である。

しかし裏では妹さちが姉あやをいじめることがたびたびあった。

悪口は当たり前。

無視。

物を隠す、物を取りあげる。ことは日常茶飯事。階段から突き落とされたこともあった。

しかしさちは親と先生の前では優等生だったりもする。

私が親にさちからいじめられたことを報告しても「あの子がするはずない」しか言われない。

泣き寝入り。

小さい頃は特にいつも泣き寝入りばかりしていたな。

それが何年も続いた。

私誰に何を言ってもだめなんだと思った。

誰も相談にのってくれないんだ。

気がついたら私はくらい地味女と化した。

踏込む(前書き)

地味女こと鈴木あや。

今回は中学生編

踏込む

とても暗い地味女。鈴木あや。

ミニスカートが流行っている時代にひざ下20cmのロングスカート。

男の子より短いベリーショートの子。

校則通りの荷物。

私服は男性用ジーンズに男性用トレーナー。

自分のことを「ぼく」と言う。

体型はデブ。

身長も高いのでデカイ女。

中身もブス。

宿題？

一回もしたことがない。

授業中？

最初から最後まで寝てる。

校則違反の子を見つける

先生に告げ口する。

給食は自分の分だけ多めにする。

嫌いな女がいたら愚痴る。

表向きはペコペコ。

先生の前では優等生。

典型的な地味ブス。

でも一人前に恋愛はする。

初めて好きになったのは隣の席のクラス委員長。
本当に好きだった。

私はデブだから。

可愛くないから。

気持ちを書かない。

告白が恥ずかしい。

ふられたらどうしよう。

友達以下になるのが怖い。

クラスで話せなくなったら嫌だ。

気持ち打ち明けて失敗するくらいならいっそのこと友達止まりでいい。

でも委員長が生徒会役員になり有名になると委員長ファンが増えた。

ある日妹さちとさちの友達が教室にきた。

「姉ちゃん。この友達がクラス委員長のこと好きなんだけどちょっと協力してよ。」

みんなの積極的さに焦った。

下級生まで行動を起こし始めたのだ。

妹の友達が持っていた手紙を私に渡してきた。

「その手紙を委員長先輩に渡して。」

はあ？何偉そうに言ってるの？！

私も委員長好きなんだけど！！

どうしてライバルを手伝わないといけないの？！

…と心で叫ぶが口には出せず（泣）。

怒りつつも顔は優しく

「わかった」

手紙を委員長に渡しにいった。

「委員長。後輩から手紙預かったよ。読んであげてね。」

「えっ?!んゝありがとう。」委員長が照れ笑いしながら手をだす。笑顔がいい やっぱりこの人が好きだなあ。

あっ…あれ…?そっか!

友達のままでもいいんだった!

ならこのまま委員長と後輩の間を行き来する中間役をしよう。そうすれば毎日しゃべるきっかけができる。

地味女の地味な考え方。だめだなあ。

だめな考え方を巡らせている間に現れた新たな敵。

隣クラスの女。

委員長の側まできて

「私…あなたのことが好きなんだけど付き合って!」

……………つて…はあああつ?!!!

今なんて言ったよ?!

この女!!

教室まできて堂々と告白するか?!

委員長！こんな女！相手にするな！！

「いいよ」「えええっ！！！！」

マジで？！

私は？！

あっ私は告白してないけど…でもさあ（泣）
特定の人とはつきあわないでえ（泣）

あゝきつと後輩泣くな（汗）

「姉ちゃん！！」

もう来た（汗）

妹さちと友達が廊下を走りながら近づいてくる。

「なんで！！なんで委員長先輩付き合っのよ？！！」

私に聞かれたってわかるわけないじゃん。

「うわぁん」泣く後輩。

ここで泣かれても困るし。

こっちだって泣きたいよ。

見るだけでよかったのに…。

人の男になっちゃった。

「委員長…なんで告白をOKしたの??」委員長に聞く私。
「可愛かったから」笑いながら答える委員長。

ショックだった。

結局女は顔ですか??

ブスはだめですか?

女らしくないとだめですか?

15歳冬…地味な失恋に終わる。

ついでに中学卒業。

委員長とは違う学校に進学。

完全にサヨナラ委員長。

と思いきやそんなにかっこいいサヨナラができるはずもない。

と言つか諦めきれるはずもない。

地味女はしつこい。

高校進学をすると委員長が地元でバイトをしていると聞きつけた。

さっそく行く。

なんと!!

私の大好きなフライドポテト屋さんで働いているじゃないか!!

好きな者と好きな物がならんでいる

なんて幸せな風景でしょうか

さっそくポテトを買う口実を使ってポテトを買いに行く

ポテト3つ注文。

ポテトを揚げてもらっている間は委員長を見る。

幸せだ。

委員長からポテトを受け取りその場を離れる。

ポテトを食べながら嬉しい余韻にひたる。

ニヤニヤしているブス。

そして気がついてやってほしい。

ポテトは3つも買っているのだ。

お気づきだろうか？その3つの行き先はあやの胃に入る。

そう…1人で食べてしまうんだ。

ほぼ毎日通い、ポテト3つを買い、1人で食べる。という生活を繰り返した結果…以前より倍に太った。

そして太った頃、委員長はポテト屋でのバイトをいつの間にか辞めていた。

未練たらたらな地味女がちよっとした喜びを見つけ、舞い上がりすぎて自分自身の首をしめたようだな。

探し始める（前書き）

地味女、鈴木あや。

これから変わっていくきっかけとなる自分解析を始める。
そのタイミングで起きた珍事件…。

探し始める

太った地味女でボーイッシュな女鈴木あや。

高校入学式5日前。

友達と近くの山まで桜見に行く約束をする。

「じゃあ明日の10時に待ち合わせしよう」
電話をきる

「あや！早く風呂にはいりなさい」と母さんが言う。

風呂場に行くとき妹とかち合う。

しかたないので久しぶりに妹と風呂に入る。

中学生のクセに色気のある妹。
色気が一つもない私。

最近友達から言われること…

「あんたが男なら惚れてたわ」

「あんた痩せたらかわいいのに」
と言われる。

たしかに…。

妹さちは美人。

クラスの子からモテモテ。

昔は私と似てると言われていたのに最近は言われない。

どっちかと言えば私は女にもてるし。嬉しくないなあ。
髪の毛伸ばしたら変わるかな？

髪伸ばしてみようかなと。

この時から髪を伸ばし始める。

色々考えてるうちに妹が風呂から出た。

私はまだ湯船の外で体を洗っている最中。

「姉ちゃんノ口いわ。先に出るよ」

風呂場のドアを閉める。

ノ口くて悪かったな。

いつもの事だよ。

マイペースと言ってくれ。

その時だった。

目の前に何か白い物が見えた。

は…？と思った瞬間…。

ガチャン！！！！

体を洗っていた私は本能的に身体を縮めて何かをよけた。

頭が真っ白になった。

はっ！！と気がつくともわりはガラスの破片がたくさん散らばっている。

裸のあやもガラスの破片がたくさん刺さってる。

驚きつつも自己解析する余裕があった。えっ…とお…これは…？
(汗)

そっかあ…天井の電球カバーが落ちてきたんだ。

うちの風呂場の電球カバーはガラスでできていて直径30cm。厚みが1cm以上ある。

って言うのは割れた後知ったが…。

ビックリしすぎて声が出ない。

頭の中はパニックだが身体が動かないしガラスの破片だらけなので下手に動けない。

脱衣場にいた妹が音を聞きつけてドアをあける。

「今の音、何？はっ？」

落ち着いた顔のままじっと私を見る。

「誰か呼んできて。」

「ふ〜ん」

ふ〜んと言っな！！

ここは普通ビツクリするところだろ！！

なぜそんなに反応が薄い！！

とブツブツいいながら刺さったガラスを一粒ずつ抜いていく。

奥の部屋の声が聞こえる。

「母さん、姉ちゃんがさあ……」

落ち着いたまま言うもんだから親達も状況が読めずに何事か？？と思いつつ歩いてくる。

だれか慌ててよ。

「あやどうした？？」

「あつ？！何これ！！さち！大変じゃん！！早く言ってよ！」

「あや！大丈夫？！」

いいえ大丈夫じゃありませんけど。

やっと慌ててくれた。

あや救助作戦が始まる。

お湯を救って流すにもお湯の中にもガラスがいっぱい。

私は立つにも立てない状態。

まず親が脱衣場からガラスをかき集める。

風呂場の床にぶ厚いじゅうたんを敷き、母があやの側までくる。

手をひいてもらい立つ。
身体についてるガラスを丁寧に落とす。
破片が時々刺さる。
イタタっ!!

茶の間まで裸でいくと親父がいた。

笑いながら

「お前どうした??」

反抗期だったあやは

「どけよ!クソ親父!」と八つ当たりしてみた。

親父が何か言っているのを横目にガラスが他に刺さってないかをチェック。

服を着る。

足に2箇所大きな破片が刺さっていた。

足の傷がうずく。

夜間緊急病院に行く。

田舎の病院なので看護婦さんもビツクリ。

「パツクリ切れてるわねえ」

「縫った方がいいかもしれないけど今日にかぎって先生が留守なのよ。明日きてくれる?」

なんのための夜間緊急病院ですか。

先生いないなら他の患者さんきたらどうするつもりだったの?(汗)

その日は消毒してもらいガーゼを貼ってかえる。

「傷がひらくからあまり歩かないでね。」

「はい。」

あっ!!明日桜見に行くんだっ!!

行かれなくなっちゃった。

夜中だったけど友達に電話して謝る。

次の日病院に行く。

先生に傷を見せる。

「あゝこの深さだと縫った方がよかったかな。でも今さら縫っても遅いですね。昨日のうちなら間に合ったけど治りが遅くなりますよ。」

「いやいや。」

昨日はあんたがいないせいで追い返されたんだよ。だったらどうすればよかったんだよ。

結局、傷は残り、完治するまで時間がかかった。

ケガして3日後。

足を引きずりながら高校入学。

探し始める（後書き）

サブタイトルの『探し始める』は本当の自分自身を探し始めると言う意味です。

ちよつとした事かもしれませんがあや自身にとっては人生革命の序章と言つてもよいと思います。

触れる（前書き）

名前は偽名ですが実話です。

地味女で平凡なあや。

人生の歯車が少しずつ狂いはじめ、マンガのような波乱万丈の道へ触れる。

平凡な人生から波乱万丈人生への序章…

触れる

太った地味女鈴木あや。
高校入学。

少し髪が伸びた。

制服はセーラー服からブレザーに変わった。

：が相変わらずスカートはひざ下30cm。
短くなるどころか長くなった。

中学からの仲間もいるので友達には不自由しなかった。

女30人男10人のクラス。

恋愛対象探しには不自由かな。

一応ここは介護福祉科のある高校。

だが地元では有名な不良高校。

普通科はヤンキーとギャルだらけ。

あやはマジメか地味な奴が揃う福祉科。
毎日バスに乗り隣町の高校に通う。

夏休み

朝、家で寝ていると親から叩き起こされる。

「あや、友達から電話」電話をうけとる。

「もしもし！あやっ！何時まで寝てるの！」

「10時すぎ…」

「そんなこと聞いてない！！大変！！テレビ見てないの?!」

寝てたのに見てるわけない。

「どうした？」

「いいからテレビみて!!」

寝ぼけ眼でテレビをつける。

どのチャンネルもみんな同じ事件を取材している。

内容は『家族6人殺傷事件』だ。

「これがどうした？」

「バカ！よく見て！」

あらっ?…県内の事件?この風景は高校の近く?

ヘリコプターで全体的な風景が撮られていた。

青いブルーシートが光っているのが見える。

近くの田んぼやあぜ道に見たことないほどのパトカーが列になり停車。

マスコミが所々に見える。

「私達の同級生が先輩の家族を殺傷したんだって!!」
え?!!!

「先生に電話したら先生がパニックになって“○○○君が!○○○君が!”って言い続けてた。」

○○○君と言うのは隣クラスの男子。

どちらかと言えばマジメではないが目立たない。

どっちかと言えば地味。

このクラスが馴染むらしくよくあやのクラスに来ていた。

夏休み前私の席に座ってたやつだよね…。

勝手に座ってて授業開始ギリギリまで座ってた。

普通だったけど本当にあいつがしたの…??

携帯に別の友達から電話がかかる。

内容は同じ事だった。

うるさいので家の電話と携帯をくっつけた。

声がデカい人同士なので会話ができていた。

やってみるもんだな。

友達同士で会話させておく。

その間に事件のことを母に話す。

ちょうどその時、テレビで校長がしゃべり始めた。

「このたびはお騒がせして申し訳ありません…」

「明日、生徒全員を集めて臨時全校集会を行いたいと思います。」

ええ!!

夏休みなのに!

学校の決定には逆らえない。

私はこの日、母の実家に里帰りする予定だった。

祖母の家に制服も持って行く。

翌日祖母の家から登校。

いつも乗っている朝一番のバスに乗車。
仲の良いいつもの仲間と4人で後ろの席に座る。
事件等はなかったかのような普通の会話。

違ったのは隣町に入ってからだった。

いつもの風景：

いつもの時間：

なのに道路が妙に混んでいる。

バスを降りる。

バス停から高校まで歩く。

高校の校門前：

見たことないマスコミの人ばかり。

朝一番についた私達。

カメラが私達に向く。

カメラのレンズが私達の方向についてくる。

シャッター音が鳴る。

顔を隠して校門を一気に走り抜ける。

玄関近くになりホツとしかけたが、

玄関までマスコミが入っている。

え？！

マスコミがここまできてる！！

こういう事件の時つてマスコミを校内に入れないんじゃないの？！
玄関から入れないよ！！

私はその場で靴を脱ぎ、手に持つ。

裏にまわり中庭を通り走って教室へいく。
マスコミを振り切るのが大変だった。

「すごい！なにこれ！」

「マスコミがここまでできてるし！」

みんな興奮状態。

いつもテレビで何気なく見ている様子…
実際に体験して困惑したあや達。

教室は1階にある。

教室の中まではこないよな。

安心して窓際で友達と会話する。

「びつくりしたなあ」

「私達もテレビに出るかもな」

後ろから声がする。

「ねえ君達は犯人の子と同級生だよな？」

ガバツと振り向き後ろを見る。

テレビでいつも見る有名アナウンサーがマイクをあや達に向ける。
後ろにはカメラも見える。

「えっ?! あっ! そうですけど…」

といいながら後ずさり。

窓際からあわてて離れる。

油断ができない。

マスコミと言う大人達の真剣さがだんだん怖くなる。

それからは窓際にいるクラスメイトに

「そこは危ないよ！」と声をかける。
スキを見せるとすぐマスコミが寄ってくる。

全校集会が始まる。

夏休みで緊急と言っこともあり、

金髪のまま来てる人

ネイルをつけたままの人もいた。

そんな人だけを強調し編集した映像だけがテレビで放送された。
いかにも不良校ですと言わんばかりの内容で…。

学校は終わったがマスコミは増える一方だった。

もう正門からは帰れない。

そう悟ったあや達は裏門から外へ出る。

裏の田んぼ中を通る。

生徒しか知らないはずの道。

だがやはりマスコミが待ちかまえていた。

テープライターとマイクとカメラをあやに向け、

「犯人の子と同級生かな？犯人ってどんな子？」

「仲良くない？何か知ってることない？」

とすごい勢いで聞いてくる。

そんな大人を友達と急いで振り切る。

走ってバス停へ…。

バス停の周りもマスコミだらけ。

もうだめだ…またマスコミにかこまれる…。

ちょうどいいタイミングでバスがきた！！

ギリギリで駆け込み乗車をする！

がマスコミが中まで乗ってきた！！

ヤバイ！

「このバスは隣町に向かうバスです。
ご用のない方はお降りください」

バスの運転手さんが助けしてくれた！！

マスコミはそそくさとバスを降りる。

こうして嵐のようなマンガのような1日が終わる。

家でまたニュースの番組を見る。

顔は映っていないかったが私達の首から下の映像は何度もテレビで出ていた。

犯人はすでに捕まっていたがその事件は前代未聞だったためニュースで流れ続けた。

そしてあやはこの事件をキツカケに

ニュースの裏側を知り、恐い思いをしたため

マスコミ嫌いとなる。

触れる（後書き）

事件に自分が関わっているわけではないが自分の近くで殺人事件が起こることはあまりない事だと思い、この事件の騒動も載せてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5297i/>

地味は地道に我道を

2010年10月9日06時47分発行